

## + 48 【あかいこ】

これは村長さんにきいた昔話です。

大山で赤子が拾われた。

拾った樵の爺は、猪の赤子かとおもったので、赤猪子（あかいこ）と名付けた。

そのころはまだ、帝（みかど）であっても村などに来て、狩をしたり野の花を摘んだりしていた。

たまたま小川で洗濯をする赤猪子を見て、二十七歳の帝はその可憐な美しさに一目惚れした。

けれども、まだ赤猪子は七歳だったので、十年したらまたここにくるから、そのときは后（きさき）として娶（めと）ることにしようと伝えた。

けれどもあっちの村こっちの村で、可愛い村娘に同じことを何百ぺんといってきた帝は、赤猪子のことをすっかり忘れてしまった。

そうして帝が百歳になったとき、八十歳の赤猪子がお祝いにやってくる。

この日ばかりはどんな身分の者でも、豪華な貢ぎ物さえあれば面会が許されたのだ。

赤猪子は、何十年も働いて小金を貯め、帝に献上するために手に入れた黄金の扇を持参した。

赤猪子は身分の違いなんて念頭になく、ひたすら帝を待ち続け、いいよる男たちをはねのけて、独り身のまま歳を重ねてきた。

待ち続け働き続けて疲れ果て、一度死んで、いまは白髪で皺だらけで骨と皮のおばけになっている。

黄金の扇に歓喜した帝は、義理として赤猪子に素性を尋ねる。

赤猪子はなにもかも正直に帝に話す。

帝は皮肉の笑いを漏らし、こんな婆あではどうしようもないのうと呟く。

それから百歳の帝は、婆あでのうて二十歳の娘なら抱いてもあげようがのうと呟く。

百歳の帝は、耳がきこえなくなっていたので、赤猪子の話も自分の眩きもきこえないのであった。

そしてすぐに帝は、赤猪子に黄金の扇で叩き殺されたのであった。

「【あかいこ】はあわれじゃのう」

ぼくは懐爺にいいました。

「時の流れというものは、すなわちこういうもので、こういうものとしては、【あかいこ】のみならず、帝もあわれです」

懐爺はぼくにいいました。